

琉球大学大学院医学研究科 細胞病理学講座 教授 川上史 先生



藏下先生 先生は、2024 年 3 月から琉球大学大学院医学研究科の細胞病理学講座の教授に就任されております。ご就任おめでとうございます。

沖縄には初めていらっしゃるのでしょうか。

川上先生 中学校の修学旅行が最後となります。

藏下先生 では、こちらで仕事をしたり、住まれたことはないんですね。

川上先生 そうですね。引っ越してきました 3 ヶ月になりますが、沖縄の大人の楽しみを満喫しています。食べ物も美味しいですし、歩き回った時に歴史あるものがたくさんあり、魅力的な場所ですね。また、私自身が田舎育ちなので、緑豊かな場所や生物が沢山いるところに癒

やされます。心豊かに琉球大学での日々を送れそうだと思います。

藏下先生 何よりも、この土地に馴染んでいただけることが 1 番だと思います。初めての地で、教授としていらして、就任に当たっての感想や、今後の抱負がありましたら教えてください。

川上先生 これまでの私は、初期研修、専攻医の教育を受けるところからずっと病院勤務でした。初めて大学の講座に所属することになり、その環境の違いや考え方の違いを感じています。

私自身が大学教員としてのキャリアを意識し始めたのは、約 10 年前です。病理診断だけではなく、研究や教育、他の組織との連携など、幅広い活動に参加したいと考えたことが、大学

での活動を志すモチベーションとなりました。そのため、診断業務に加えて、人材育成のための環境づくりに力を入れていきたいと思っています。

藏下先生 素晴らしい抱負をありがとうございます。

病理の中で特に得意とされている分野や専門分野は何ですか？

川上先生 私自身は婦人科の病理学や泌尿器科の病理学が非常に好きな領域です。もちろん、病院での診断病理の勤務中には、どの臓器の診断も行いますし、どの臓器も興味深いですが、研究や診断の面で重点的に取り組んでいるのは婦人科で、特に子宮頸部の腺がんの診断、研究に力を入れています。

藏下先生 今は子宮頸がんの発症において、主に HPV が関与している傾向がありますね。

川上先生 そうですね。

沖縄ではやはり HPV 関連のがんが多いと聞いています。琉球大学の婦人科には関根正幸先生が昨年 11 月に着任され、子宮頸がんの診療、研究には共に取り組んでいきたいと思っています。

藏下先生 今回、教授になられて、講座の運営や、どの様な病理講座を目指しているのかお聞かせください。

川上先生 前任の加留部先生が名古屋大学にご栄転されてから 2 年間、細胞病理学講座の教授は空席でしたので、真っ新たな状態からのスタートと言えます。大学院生もいないし、教員も私 1 人ですが、その分、夢は広がります。現状では病理医は基本的に病院に属して診断病理学の研鑽からスタートすることが一般的です。沖縄県内では、病理医を育成するプログラムは基本的に大学を主幹施設とするプログラム 1 つのみで、沖縄で育つ病理医は皆大学と関わりな



がらトレーニングをしています。病院に属して専門医を目指す若手医師が後期研修医時代から講座の研究に関与し、無理なく研究マインドを持った人材を育てられるよう環境整備を行っていきたくて考えています。私自身は病院で診断病理医として勤務して、患者さんから学ぶスタイルで研究を行ってきましたが、いわば講座をコラボレーションのハブのような役割に位置づけて異なるバックグラウンドを持つ人材が集まるような教室を目指したいと思います。

藏下先生 これから新しく様々な研究を始められると思いますが、沖縄という土地に来て、特に力を入れたいと考えている研究や、先生自身が取り組んでいる研究などはありますか？

川上先生 着任後 3 ヶ月という短い期間ですが、医学部 2 年生の学生たちが既に 3 人講座に通ってくれています。彼女たちと過去の琉球大学病院で診断された子宮頸部腺がんの診断の見直しを行っていますが、まずはそれぞれに小さなプロジェクトに取り組んでもらって、研究は楽しいと思ってもらいたいですね。具体的に取り組みたいと思っているのは、私がこれまで行ってきた子宮頸部腺がんの研究の一環で、他施設共同で集積した子宮頸部腺がんのデジタル化した組織標本と臨床データベースを用いたリンパ節転移や予後不良に関わる組織学的な因子の検討です。

熊本では家族性アミロイドポリニューロパチーの家系の集積があった関係で、心アミロイ

ドーシスの研究を行っていました。沖縄でも地域の特色を生かした研究の新たな展開があればと思っています。

藏下先生 ありがとうございます。

これからが重要だと思います。様々な取り組みを立ち上げるには、若い人たちの力を借りることが必要ですが、沖縄では病理医が不足しており、大学や関連病院を含め、病理医の存在は臨床医にとって非常に重要です。今後の大学での病理医の人材育成について、どのようにお考えですか？

川上先生 那覇周辺を中心に、この3ヶ月間で県内の主要な病院を訪問し、地域に根ざして病理診断を担ってこられた先生方とお話する機会を数多く持つことが出来ました。同世代の病理医を含む働き盛り世代の病理医が主要な病院に複数の常勤医体制で配置されている沖縄の病理の状況は、人を育てる環境として非常に良いと感じています。

大学病院では、専門医が少なく、若手の専攻医、非専門医が多い状況ですが、大学で診断病理の基礎を学び、県内各地の病院で大学では経験できない臓器について学ぶ。改めて大学で教育や研究にも携わり、その後離島を含む各地の病院でのラボマネジメントなども勉強してゆく、といった大学と地域を行き来するモデルは魅力的に感じます。

大学と連携出来る地域の医療機関や指導医が存在するのは素晴らしいことで、地域の特性や個人のニーズに合わせて、バランスの取れた病理医を育てていけると考えています。

藏下先生 素晴らしいお考えですね。どの分野もそうですが、連携して協力することが沖縄の魅力だと思います。沢山の病理医を育てていただければと思います。

今まで医師会とのかかわりは少なかったかもしれませんが、沖縄県医師会は、琉大医学部の同窓生である田名先生が新会長に就任し、日本で最も若い都道府県医師会の会長として、大学



や県との更なる連携についても考えているようです。沖縄県医師会との関係や、ご意見・ご希望がございましたらお聞かせください。

川上先生 医師会健診センターと医師会の関係はどの様なものなのでしょう。

藏下先生 医師会の健診センターは、例えば那覇市医師会や中部地区医師会などが所有する検査センターであり、主に健康診断を行います。その業務の中には病理検査も含まれますが、全ての医師会に健診センターが設置されているわけではありません。沖縄県医師会は健診センターを所有していません。

川上先生 沖縄県内を見渡すと、比較的中規模な病院で、年間約1,000件から1,500件の病理検体数の施設でも、病理検査室を持っていないところが多いと感じました。病理検査室が無いというのは、技師が不在であるか、又は標本作成設備がない状況が考えられますが、そのような病院は検体を本土に送るなどして対応しているようです。

適切なタイミングで、臨床医の要望に応える質の高い病理診断を患者さんに届けることには医療インフラとして大きな価値があると考えており、理想としては、沖縄での病理診断を沖縄で完結させたいと考えています。県内で病理診断を行うためには、病理医の育成と共に、標本作成が可能な設備や体制が必要です。各病院に

病理検査室を整備するとともに、現在、共有施設として運用されている医師会の検査センターラボを強化し、技師の育成にも役立てる事ができれば、沖縄の病理診断体制の整備に寄与が大きいのではないのでしょうか。医師会の健診センターが重要な役割を果たすことで、県内での検査体制の充実、地域内での医療サービスの向上が期待できるのではないかと思います。

藏下先生 主に健診データや子宮の細胞診、バイオプシーで得られるものだと思いますが、マンパワーの問題や県内での資源が限られている背景があるため、外注先として商業ベースのメーカーを利用しているのだと思います。もちろん、先生のおっしゃるように、診断結果が出るまでの日数を考慮して、県内での処理が最も望ましいと思いますし、ぜひそのような方法で取り組んでいただきたいと思います。

これまでの経験から、神戸や熊本と沖縄の状況には違いがあるかもしれませんが、それが具体的にどのような点で違うかについてはご存知でしょうか。

川上先生 前任地では常勤医が不在であっても技師がいて、病理標本を作成できる病院が比較的多かったように思います。技師がいて、細

胞診を行い、病理標本を作成することができれば、病院間の連携により質の高いタイムリーな病理診断が可能となります。診療報酬面でも、最近デジタル化した病理標本で診断を行うデジタルパソロジーや、病院間の診療連携には追い風で、離島など地理的な困難のある沖縄県内での診療体制の整備に取り組む好機と感じます。

藏下先生 検体を診断する病理医や標本を作成するラボを沖縄にもっと設立する必要がありますね。

川上先生 そうですね。

藏下先生 県医師会だけではなく、地区医師会への要望にもなるかと思います。

最後になりますが、先生の趣味や健康法などはございますでしょうか。

川上先生 沖縄に来て、昆虫が非常に美しいので、昆虫の観察や写真撮影に夢中です。見たこともないほど大きくて美しい虫がたくさんいます。何の虫かを日々勉強しています。

藏下先生 夏場になると、かなり大きなセミも見かけますよ。



川上先生 楽しみにしています。

藏下先生 写真の趣味もお持ちなんですね。

川上先生 写真というとはこれまでは病理検体や学会用の組織写真程度でしたが、外に目を向けると、面白いですね。虫を見に行きたいと思うと外に出るようになりますので、健康にも良いかもしれません。

藏下先生 学生時代に何かされていましたが？

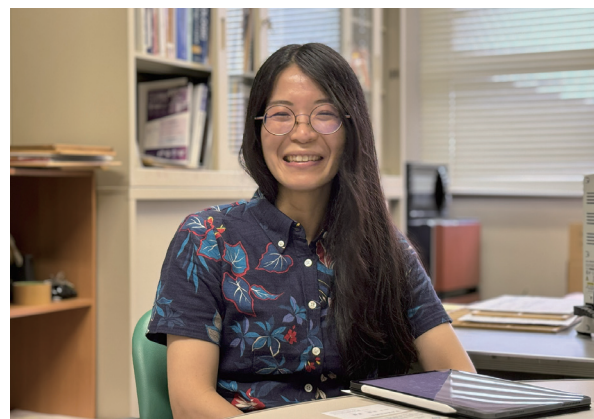
川上先生 学生時代は空手をやっていました。

藏下先生 今でも空手をやったりしていますか？

川上先生 今はやっていませんね。しかし、沖縄にはたくさんの道場があるので、近くを通ると気になったりします。

藏下先生 沖縄は空手の発祥の地ですからね。座右の銘などはございますか？

川上先生 座右の銘は、「明歴々露堂々」です。全てが明らかであるという意味です。病理医の仕事は、日々形態学に基づいていますので、自分の目で確認したものが真実であると信じて仕事をするのが重要です。ですから、困難な時や迷う時でも本当は目の前にあるものにすでに



PROFILE

2005 年 3 月	神戸大学 医学部医学科 卒
2005 年 4 月	焼津市立総合病院 初期研修医
2007 年 4 月	京都大学医学部附属病院 病理診断科 専門修練医
2009 年 8 月	神戸大学医学部附属病院 病理診断科 特定助教
2014 年 11 月	MD Anderson Cancer Center, Houston, Texas, USA, Visiting Scientist
2017 年 11 月	熊本大学病院 病理診断科 特任助教
2024 年 3 月	琉球大学大学院医学研究科 細胞病理学講座 教授

明らかな答えがあるのかもしれないと考え、自分を励ましています。

藏下先生 初めて耳にしました。素晴らしい考え方ですね。本日はありがとうございました。

インタビューアー：広報委員 藏下 要

